

バレーボール人生50年史の一コマ

～チーム作りから審判まで～

原田 智*

はじめに

教職について46年、バレーボール競技に携わって50年余りの人生も来春3月、一応終止符が打たれようとしている。半世紀という長い間には多くのドラマが生まれた。日本中に、世界中に素晴らしい仲間との出会い、師と仰ぐ多くの人達との出会い、頼もしい教え子達との出会い、まさしく、バレーボール人生冥利につきる半世紀であった。

昭和21年4月旧制中学最後の学年として入学した頃、一度は生命を捨てた幼年学校や予科練帰りの猛者達が、4年、5年生に復学してきて学内は険悪な状態が続いていた。昭和22年6・3・3制という新しい制度が発足し、我々の学年は下級生のいない年が4年間続き、スポーツをやるにも部員不足が生じ、1人が2・3の種目をかけ持ちしていた。私は陸上競技、ラグビー、バスケット、バレーボールとかけ持ちし、3年になって1つの種目に絞れたのがバレーボールであった。

その切っ掛けは、一冊の本“月刊バレーボール”という本の中で見た、早稲田大学バレーボール部の岩田三郎氏の素晴らしいジャンプと柔軟なフォームの写真であった。勿論、当時はテレビやスポーツ新聞も無い時代で、我々の目に入ってくるバレーボールの知識はこの本だけであった。こうして虜にされて今日まで続けてこられたのも、多くの人達の支えと理解があったからこそである。この支えられてきた50年余りのバレーボール人生の中で、指導者として、審判員として嬉しかったこと、悲しかったこと、感動を与えられたこと等々、多くの出来事と出会った中から特に印象に残っている一コマを拾ってみたい。

雌伏して時を待つ

スポーツマンにとって“オリンピック”というのは、憧れと夢とロマンの場であり、一度は参加してみたいと思うのが常である。指導者にとって、自分が果たせなかったオリンピック参加への夢を、自分が育てた選手をオリンピックへ送り出してみたいと思うのが常である。

昭和31年体育指導者として、日本大学鶴ヶ丘高等学校へ着任、授業が終わるとクラブ活動の指導に専念し着々と

その成果が現れてきた。又、指導の傍ら、自分自身も当時の教員チーム“世田谷教員”（後の東京教員）に所属し、砂田氏（日本協会副会長）、朽掘氏（バレーボール学会会長）、宮沢氏（前駒澤大学教授）、川合氏（順天堂大学教授）、橋本氏（国士舘大学教授）、服部氏（前都立高校校長）といった錚々たるメンバーが活躍していた。教員選手権や国民体育大会に優勝・準優勝と華々しい成果をあげ、またお互い高校チームの指導者でありプレイヤーでもあり、実践を通してバレーボールを学んできた。

当時、東京の高校は全国的な強豪チームがひしめき合い、特に中大付高の強さは群を抜いていた。これを倒すには並のチーム強化では勝てない時代で、各指導者達はチーム作りで苦慮していた。昭和38年3月受験生の中に2人の逸材を見つけた。一人はハイジャンプの選手、一人はバスケットの選手で、2人とも185cm～188cmという長身であった。入学したらバレーボールをやってみないかと話を持ちかけてみた。幸い2人とも入学試験に合格し入部してきた。彼等はバレーボールについては全くの素人であったが、そこはさすがにスポーツマン、理解も早く指導に適確に反応し、時には徹夜練習を含むハードな練習にも忍耐と努力でメキメキ上達していった。

丁度この頃は、昭和39年東京オリンピックでバレーボール競技が初めてオリンピック種目として採用され活気づいていた年であった。私自身も、役員としてオリンピックに参加することができて、夢の一つをかなえることができた。初めてみる外国人選手のパワー溢れるプレイを目の当たりに見て、唯々驚きの毎日であった。勿論、彼等にもオリンピックを見学させ、刺激を与えて一層の奮起をうながした。日本チームも東京では銅メダルという好成績で終了し、翌40年彼等も高校3年となり益々油がのって来た。そんなある日、全日本チームの監督：松平康隆氏（日本バレーボール協会名誉会長）から、彼等2人を全日本候補として預かりたいとの連絡があり、喜んでお預けいたしますと返事をした。彼等2人ともその頃は190cmを越えていて、松平氏の大型チーム作りの一員としてスタートした。その後、高校での練習と全日本での練習で益々頼もしい選手へと育ち、チームも中大付高と対等に戦えるように成長してきた。

昭和41年3月卒業を間近に控え、進学先を決めなくてはならなかった。2人とも是が非でも、オリンピックの選手として育ててほしかった。それには信頼できる指導者が、常に指導できる態勢が整っている大学をと願っていた

*立正大学文学部教授
全日本大学バレーボール連盟審判委員長

た。彼等の意見も最終的には私の意見と一致し、恩師である中田茂先生（故人）に預けることにした。昭和42年4月彼等2人の進学先を確かなものにしたのも東の間のことで、高等学校を余儀なく退職せざるを得なかったのであった。その後、立正大学で大学人として教鞭をとることになった。大学のバレーボール部を指導する傍ら、審判員としての道も拓いていった。その後、2人は大学でも活躍してくれたが、一人は腰の故障で全日本を辞退し、一人はメキシコ・オリンピックに出場、銀メダルを獲得し、その4年後のミュンヘン・オリンピックでは金メダルに輝き、ついに世界の頂点に達した。過去、進学の問題でとやかく言われたが、松平監督や中田先生に預けたことも、私の目に狂いはなかったのだと、誇りに思っていると同時に、我が人生に悔いなしの気分であった。これぞ将しく、雌伏して時を待った高校教師時代の11年間であった。

喜びとかなしみのミュンヘン・オリンピック

昭和47年8月、第20回ミュンヘン・オリンピックに視察の機会が与えられ、教え子の激励も兼ねて、この際ヨーロッパ各都市の状況をつぶさに観察しようと、協会役員数名と羽田空港を飛び立った。ロンドン・パリ・ローマ・ジュネーブの体育・スポーツの現状、大学のスポーツの状況等を視察し、ローマからミュンヘンへ飛ぶ時、空港は異常なほどの検問にあった。何か変だなあと感じながらミュンヘン空港に到着、タクシーを拾ってホテルへと急いだ。ホテルへ着いて始めて大変な事件が発生していることを知った。順調な進行状態にあった平和の祭典が、11日目にその平和が破られた。8名のパレスチナ人テロリスト達が、オリンピック村を襲い、イスラエル人選手2名を殺害し、さらに9名を人質にとって市内を逃げまわっているとのこと。我々も外出禁止令が出ていてホテルに缶詰状態、町の中は、戦車、装甲車、パトカーがサイレンを鳴らしながら走り回っていて、まるで戦場にいるみたいで騒然としていた。

この日の競技は全て中止され、IOC委員会が臨時招集され、オリンピック続行か、中止にするかの会議が開催されているとのこと。午後6時頃になって明日の競技も中止と決定し、この間、ゲリラ代表と20時間余りの交渉の結果、夜遅くなってゲリラ達を、人質と共に国外へ脱出させる手はずがついたということだ。こうしてテロリスト達が飛行機に乗ろうとしたところを、西ドイツ狙撃班が急襲し、銃撃戦となってテロリスト5名と9名の人質が射殺されたという誠にむごい悲劇的結末となってしまった。

一体どういうことだ。神聖で侵すべからざる平和の祭典が、いまだかつてない無残な事件で血が流され、しかも、多くの優秀な若い選手達が犠牲となり、オリンピック史上大汚点を残してしまった大会であった。勿論、競技は中止され、午前中メインスタジアムで犠牲者の追悼式があり、

葬送典の流れの中で我々も参加し静かに冥福を祈った。しかし、暴力に屈することなく2日遅れて競技は再開され、いまわしい事件を思い浮かべながら若人達はそれぞれの競技場へと向かっていた。日程も、時間も大幅に狂ってしまい、日本の男女チームも調整に苦慮していた。

順調に勝ち進んできた女子チームは、決勝でソ連と対戦したが大接戦の末、3対2で健闘むなしく銀メダルに終わった。男子チームも、準決勝でブルガリアに大苦戦、今日、語り草ともなっている奇跡の大逆転を演じ、勝を拾った。決勝では東ドイツに3対1と比較的楽勝のケースで勝ち、ついに日本のバレーボールを世界の頂点に導いてくれた。今から丁度30年前の偉業であった。勿論、教え子も大活躍、一人時間差攻撃にドライブサーブにと縦横無尽に暴れ周り、センタープレイヤーとして世界にその名を轟かせてくれた。世界一、そして金メダル獲得の立役者となり、指導者にとってこれ以上の喜びはない。昭和41年の進学でのいざこざに苦しんだ夏の思い出がいっぺんに吹っ飛んだ気持ちだった。“これで良かったんだ”と、これからは私も世界の檜舞台で活躍してみたいと、教え子と共に必ずや・・・と自分自身に云いかけ、一人感涙にむせびながら、ビールの町ミュンヘンでの一夜を過ごした。

国際審判員として

教え子が金メダルを獲得し、自分も世界の檜舞台に立ってみたい、教え子と共に世界を駆け巡ってみたいと夢を抱いていた。昭和48年8月幸い日本協会からの推薦を受けて、モスクワ体育大学でのインターナショナル・レフリー・コースの参加の機会を与えられ、当時としてはめずらしくヨーロッパでの受講であった。丁度この頃、モスクワ・ユニバーシアードが開催されていて、講習のモデルは全てこの大会チームというレベルの高い内容であった。10日間の講義・実技・口頭試問・テストと、語学力のハンデを乗り越えて何とか国際候補の資格を取得し、後は国際試合の主審・副審を各5ゲームを経験することによって、国際審判員のライセンスが与えられることになっていた。

昭和48年11月、8月のモスクワに続いて、当時の日本チャンピオンの日本鋼管チームと共に再びヨーロッパへ派遣された。東ドイツ（当時は東・西に分かれていた）のライプツヒヒでのクラブ世界選手権大会である。終了後は、フランス・ベルギー・スペイン・イランと転戦し、ノルマである10ゲームの数をこなして帰国した。この年、教え子と共に世界の檜舞台に立てたと同時に、国際審判員としてのライセンスも取得し、指導者として、審判員として、最高の夢を実現させた。その後、度々外国遠征の機会が与えられ、ルーマニア・メキシコのユニバーシアードを始め、カナダ・アメリカ・メキシコ・キューバ・ブラジルと、世界の多くの審判員との交流もできて、思い出深い歴史を作らしてもらった。その中でも特に、メキシコ・ユニ

バーシアードでの印象が強く、世界にはこんな国もあるのだなあということを知らされた。

昭和54年8月ユニバーシアードの為、再度メキシコを訪れた。8月31日、9月1日から試合が始まるというのに未だレフリー・クリニックも開かれず、何の連絡もない。その夜、我々2人の審判員のホテルが間違っていたから他のホテルに移ってくれという連絡、しかも、ホテル代を払って出てこいということで、一体どうなっているのかと憤慨したものだ。その夜、監督・審判の会議が6時から始まることになっていたが、7時になっても8時になっても始まらない。インターフォンの故障だとか、会長がまだ来ないとか、すったもんだして始まったのが9時、明日から試合が始まるというのに、未だ2・3の国が到着していないので、この国が到着してから始めたいから一日延長すると・・・。試合運営もデタラメで試合前になって線審用の旗を紙で作っていたり、送迎用の車が時間通りに来ない。その為、試合会場にも時間通りに行くことができず、担当の審判員が到着してみたら、すでにそのゲームが終了していたこともあった。又、点示用の掲示板がなく係員が点数用紙を一つ一つ書いて示している。試合用のボールが準備されず、お互いのチームから借りて行う始末。各国審判員のルールの取り扱いもまちまちで、国際ルールの勉強不足が目立った。前日のレフリー・クリニックを省略した為、迷惑を被ったのは各チームで、監督、選手達は混乱していた。そして、日本対メキシコの試合では主審のベルギーの審判員がこれを拒否した。理由は、メキシコ組織委員会のルーズな運営に対して不満を表したものである。この日、私は審判割当もなく、日本チームの応援にまわっていたが、役員が「お前やってくれ」と。練習試合じゃあるまいし、やれるはずもない。公式の国際試合は、全てニュートラル審判員でなければならないこと位わかっているはず。一時間後、たまたまグアテマラの審判員が来たので彼に依頼して、やっと開催されたという一幕もあった。それにしても、理由はともあれ、あそこで拒否したベルギー審判員の態度には驚かされた。日本人にはとても考えられないことであった。

以上のように大会の運営不備があちこちに見られ、腹が立つというよりも呆れ返ってしまった。終わりが近づいてきて、又問題が生じた。決められている国際試合での日当も支払われず、ソ連から来た審判員はその日当をあてにしていた為、タバコを買うお金もなく、我々がカンパした一幕もあった。それにしても、この大会経費は一体どこに消えてしまったのか？当時のメキシコの会長が、現在の国際バレーボール連盟の会長を務めているが？メキシコで“アスタ マニヤーナ”という言葉があるが、よく聞くと日本語の“明日間に合うがな”・・・と聞こえる。日本語で“明日があるさ”とか“明日又会おう”という意味だが、彼等の運営は将しく、アスタ・マニヤーナ的であり、几帳面な日本人にとっては一寸理解に苦しむことが多すぎた。

ジュリーとして（神戸ユニバーシアードから）

国際審判員として直接笛を吹くことから一応退き、審判指導として活動する立場になった第一歩が、神戸ユニバーであった。昭和42年東京ユニバーは北朝鮮の国名呼称の問題がこじれ、社会主義国の総ボイコットという事態の中での大会で、女子はフィリピンと開催国日本だけの2チームで、僅か二試合（2回戦った）に勝っただけで金メダルであった。男子はかろうじて7ヶ国の参加があつて、共に優勝し形だけはアベック優勝ではあったが、強豪国のボイコットで何か物足りない大会であった。しかし、神戸大会は世界の強豪国の参加でのアベック優勝で、価値ある金メダルであったと云える。

昭和60年8月神戸ユニバーは、史上最高の106ヶ国、3949名という大選手団を迎えて、盛大な大学生の祭典となった。前年のロス五輪はソ連を初め多くの社会主義国がボイコットし、その前のモスクワ五輪は、アメリカ、日本を始め自由主義社会の多くがボイコットというように、政治がスポーツ社会に介入し、世界的スポーツの危機が目の前に迫ったかのような緊迫した年が続いていた。そのような状態の中にあつて、神戸大会には、戦火をくぐりぬけ内乱を越え、さらには飢えの国からと困難な政治・経済のさまざまな壁を乗り越え、米・ソを始め韓国・北朝鮮を含め多くの国々から参加を得たことは、平和日本の快挙でもあり、日本が作り得た世界平和の縮図とも云えるものでもあった。こうして一見平和的に見えた大会の中にもいろいろなことがあつた。二・三の話題を拾ってみよう。

レバノンの審判員は、大会が始まって3日目に来日した。彼はメキシコ、ブカレストでのユニバーで一緒だった懐かしい友人の一人であった。審判員宿舎で久しぶりに会った彼は、私の顔を見るなり名前を呼んで抱きついてきた。日本に始めて来て誰も知っている者もないし、遅れては来るしで心細かったに違いない。当時のレバノンには戦火につつまれていた。あちこちの空港を移動しながら3日間経過して、やっとたどり着いたが、結局、バレーを始め多くの選手団は参加を断念し、役員、バスケット競技の選手を含めた14名だけが到着したとのこと。戦火の絶えない中近東の国から来た人達にとっては、日本は平和で裕福な国だという印象を強くした。又、韓国と北朝鮮の冷たい関係もなかなか難しいところがあつた。ハンゲル語が通じ合う唯一の国同志の人達なのに会話もない。食堂での光景を見ていると、韓国の審判員が自分のテーブルに誘って話しかけようとしているが、食事が終わるとさっさと席を立てて姿を消すありさま、韓国の審判員が肩をすごめながら我々の顔を見て苦笑いしていた。同じ朝鮮民族なのに、もっと打ち解けることはできないのだろうか、気の毒な思いをした。

また、我々日本人にとっては理解に苦しむ光景も多々あ

った。女子の試合で西ドイツ対スイスの試合の時、スイスの選手の白いショートパンツが見る見る赤くなってきた。しかも、コート上にも落ち始めたので、監督はタイムを取り、その上にもう一枚のパンツをはかせて試合を再開したが、またたく間に赤くなってくる。我々ジュリーは監督を呼んでメンバー交代を指導したが、全く無視され最後まで試合を続行させた。女性特有の生理現象とはいえ、もしこれが日本の指導者であったなら、マスコミも黙ってはいなかっただろうし、人権蹂躪も甚だしい事態として叩かれたであろう。試合終了後、監督も選手達も何事も無かったような態度でロッカー室へ消えていった。驚かされた一幕であった。

日本の女子バレーの準決勝で、西ドイツ戦はまさに死闘であった。180cm台を6人揃えた大型チームに、平均身長173cmという小柄な日本人チームは、ブッシュ、フェイント、タッチプレイというゲリラ的戦法で相手の高いブロックを錯乱し守備陣をかきまわす戦法で挑んだ。ゲームはフルセットとなり、13対14とリードされたと思われたが、電光掲示板は14対14となっていた。西ドイツからのクレームに、ジュリー、審判、記録が協議したが確認がとれず、判然としないという結論で西ドイツチームも納得し、ゲーム再開となり、再び西ドイツが14対15とリードした。しかし、日本チームはこのピンチも切り抜け、17対15で奇跡的な勝利をもぎ取った。この修羅場を乗り切った決勝は、ナショナルチームで編成された北朝鮮との対戦、一セット先取されたがその後、三セットを連取し遂に金メダル獲得となった。それにしても、あの準決勝、西ドイツ戦での幻の一点が日本チームに勝利をもたらしたことは、幸運であったと言わざるを得ない。

日本の男子チームは予選リーグで思わぬ国（ギリシア）に破れはしたが、二次予選リーグに進出、平均身長190cm以上の強豪イタリアを悪戦苦闘の末破り、準決勝で韓国と対戦、国際大会のゲームとしては記録に残るゲームとなった。第一セット、第二セットはあっさり韓国に取られて迎えた第三セットは、13対13から競り勝ってもぎとったことで、すっかり勢いに乗ってきた。第四セットは最初からリードしてこれを取り、フルセットに持ち込んだ。これで完全に日本のペースとなり、再三の好レシーブに、ブロック、スパイクが面白く決まって奇跡の大逆転で、しかも国際大会の準決勝というレベルの高い試合で、15対0というパーフェクト・ゲームの勝利は稀な記録であった。私自身も初めての経験であった。韓国は2年後のソウル・オリンピックを目標にと若手のしかもほぼナショナルチームで編成されたチームで、平均191cmという十分優勝を狙えるチームであっただけに、韓国の指導陣にとってはこの上ないショックであったと思われた。監督はベンチにセットしてあるブザーに手を置いたまま離すことなく、放心状態の姿勢が続いていた。そのために、体育館内にブザーの音が鳴り響き、日本の役員がその手をそっと離して



やるという光景は、我々も強く印象に残ったゲームであった。決勝はソ連を相手にフルセット、3時間9分という大接戦で勝利し、男女アベック優勝という偉業を達成し、有終の美を飾った神戸ユニバーであった。

壮絶な死との出会い

昭和61年1月24日長いバレーボール競技生活の中で、試合中にプレイヤーの“死”に直面したのは初めてであり、恐らく今後二度と経験することはないと思われる悲しい出来事であった。

第19回、日本リーグ（Vリーグの前）女子の大会が松江市総合体育館で開催され、いまだ正月気分も覚めやらず、人気チームの来場と、久し振りのバレーボール競技ということで会場は超満員であった。日立対ダイエーの試合が6時30分開始。今日まで日立の連勝街道が続き、日本リーグ初登場のダイエーは到底勝ち目はなく、日立の楽勝かという予想であった。唯、ダイエーには、ロス・オリンピック後、アメリカ女子チームのエースであったハイマンとクロケットという強力な選手を補強し、着々と力をつけてきていた。監督に「今日はスタメンから行くぞ」といわれた2人は張り切ってコートに向かった。第一セット、この2人が打ちまくり、日立は7点で失う、しかし、第二セットに入ってダイエーは2人を外して日本人だけのチームで挑んだが、こうなると日立のペース、ダイエーは1点しか取れず終了、第三セット、再び両選手を投入し、素晴らしいゲーム展開となり息づまるシーソーゲームとなった。7対6の時、監督はハイマンの疲労度を心配し交替を告げてベンチにさげた。彼女はベンチに腰かけ一声、二声、コート上のチームメイトに声をかけ、手をたたいて応援していた。この間、一分位か、突然、ゴツンという鈍い音をたてて、ベンチの前に倒れていった。マネージャーがあわてて抱きかかえる。丁度、本部席の私の目の前でもあり、驚いて直ぐ駆け寄って行った。顔をうかがうことは困難だ

った。貧血かと思ったが様子を変だ。瞳孔も開いているようだった。慌てて医者や看護婦を呼んだが見当たらない。大至急、救急車の手配をお願いし日赤病院へと急いだ。

ジュリーという立場上、体育館に残りゲームを続行した。残りの一人、クロケットが打ちまくり、大接戦の末16対14でダイエーがものにした。ゲーム中病院から刻々と連絡が入ってくる。しかし病状は思わしくない報告だ。自力では呼吸していないと、心臓マッサージでかろうじて保っているという。試合は第四セット、日立がまき返し、フルセットに持ち込んだ。第五セット、前半はクロケットの大活躍で大きくリードし、後半戦は余裕すら見せてクロケットを外して日本人だけのメンバーに切り替え、約3時間という長い試合の結果、遂に日立の連勝記録を88でストップさせるという大金星で試合は終了した。選手達はコート上で狂喜乱舞し、抱き合って泣いていた。が反面、ハイマンの様態は益々心配になってきた。試合終了後、病院へかけつけたが面会謝絶、多くのファンや報道陣でロビーは混乱していた。一応ホテルへ引き揚げ自室で待機していた。9時半過ぎ、遂に来るものがきた。ハイマン選手の死亡の知らせである。医師団の懸命な治療の甲斐もなく、9時36分、“急性心不全”という死因で尊い生命が失われた。それからが大変であった。協会関係者、新聞社等に連絡とあわただしい夜になった。オリンピックという修羅場を乗り越え、鍛えに鍛えられた身体、心臓であったはずなのに、196 cm という大きな身体が心臓に災いしたのだろうか……。スポーツ選手のマルファン症候群が話題になった事件であった。

この後、バレーボール協会を始め多くの協会が選手たちの健康管理の見直しを実施し、医者の健康診断書を提出することを義務付けることになった。我々指導者も、人ごとではなく、常に健康管理に万全を尽くし努力をしなければと、痛感した夜であった。夜中午前2時30分、遺体は、当地のダイエー社員10名によって大型車に乗せられ、神戸のダイエー体育館へと運ばれていった。外は寒い夜で小雪が舞っていた。

体育・スポーツの危機

大学における「保健体育」の教科が必修科目から外されて、大学体育・スポーツに危機が訪れている。当時の文部省は、保健体育の教科採用については各大学の自由意志に任せるということであった。これに飛びついたので多くの私立大学である。何故ならば、体育4単位をなくすことによって、多くの専門科目を1・2年次に取り組むことがで

きる。体育は用具・器具が高すぎる。施設用地の確保が難しい。非常勤に経費がかかり過ぎる等々の理由である。学生の中には運動嫌が多く、道具を持って来るのが面倒だと。

選択制にした大学は、受講生が激減した。そのために、多くの非常勤教員が犠牲になった。又、専任教員の退職後の採用も無しというところが多く、このままでは大学から体育教員が消えていく日が近い。体育教員養成大学や体育学部を持っている大学は、路頭に迷う。大学院を卒業しても採用も無く、かといって企業は不況続きで、これも採用が難しく、全く八方塞がりの状態が続いている。人間社会で生活していく為の最も大事な「健康教育」ということが虐げられてしまった。同時に、大学スポーツにもかげりが見え始めてきている。体育を通して得た知識を、課外活動に生かそうという学生が減少し、大学によっては伝統あるクラブに赤信号が点り始めている。今や日本のスポーツの多くは、アジアでは三流になってしまった。中国・韓国に歯が立たなくなったスポーツもある。

最も活気づけていかなければならない大学が、日本では沈没してしまう恐れがある。

ユニバーシアードで今後日本チームは無残な敗退を繰り返す危険もある。大学体育・スポーツの活性化が、日本のスポーツ全体を救う一つの大きな要素になっていることは間違いない。大学体育の選択制のツケが徐々に現れ始めていることを、我々はもっと真剣に受け止め、当該機関に強く働きかけていく必要がある。

む す び

学生時代、恩師に“常にありがとうの気持ちを忘れるな。人生は常に感謝、感謝の日々である。”という言葉を教わった。将しく50年余りのバレーボール人生は、多くの人達に感謝する人生であった。人間、一人では生きてはいけない。人は助けたり、助けられたりの人生である。バレーボール学会も日本のバレーボール界をリードしていく立場にある。指導者が少なくなる、研究者が大学から消える。競技人口も少なくなる今日、益々責任重大なバレーボール学会となろう。夢よ、もう一度、日本のバレーボール界を復活させていこう。

老兵は消え去るのみ……。

参 考

私の遠征日誌から
私の日記帳から
私のジュリー日誌から